

心理学知識の実生活への提言（その4：最終）

【4 人としての資質について】

4. 1 地道な努力の継続

人間関係にウェートを置いて話を進めてきたが、自己の内部的領域で腕を磨くことが必要とされることは言うまでもない。社会的信用も影響力も、全てはここに基盤があることを忘れてはならない。なぜならば、社会的な評価のパラダイムは一夜明ければ激変するという性質を含んでいるからだ。バブルの崩壊はそのよい例であろう。

実社会の仕事の恐ろしさは、結果のフィードバックがやや遅れてやってくるという点にある。したがって、よほどしっかりと社会的評価のパラダイムやそのニーズを把握し、これに備えるコンセプトやメソッドを日頃から用意しておかないと一人取り残されてしまうことになりかねない。

一例だけ挙げておこう。コンピュータが普及し始めた頃、ある大学の先生は「コンピュータに人間が分かってたまるか」と豪語し、コンピュータを一切無視して仕事を続けていた。したがって、その先生は以後、コンピュータなるものの効用も限界も正に評価できない人になってしまったのだ。今日のレベルでは、誰しもがコンピュータが人間を理解するなどとは思ってもいない。ただそれが、例えば情報の管理や検索、通信手段として便利だから、それをツールとして使っているに過ぎないのである。しかし、その先生は未だに全ての作業を手で行っているため、必然的にその仕事量は限られ、外界の情報に対するレスポンスも遅くなる。同年代で、当初から正にコンピュータを評価し、また一時期、白髪を振り乱してこれに取り組んでいた別の先生は、今日コンピュータを実に巧みに（心など奪われず便利なツールとして）使いこなしている。コンピュータが本当に日常的になって日が浅いが、心しておきたいエピソードでもある。

4. 2 世俗的欲求からの脱却

既に述べたが、お金持ちになることは重要なことではない。もっと別な形での社会への貢献、自己実現への欲求を目指すべきだ。お金のために自説を曲げて権力者のお先棒を担がされ、いつの間にかお金だけがもっとも頼りになると思いこんでしまったという人がままたある。一方で、このような心的態度のためにどれほど多くのものを失ってしまった人々がいることだろう。歴史書を紐解けば、そのような例はいくらでもある。そして同じ歴史書は、そのようにしてまで得た彼らのお金なるものが微々たる額に過ぎず、それに引き換え、彼らが失った社会的信用は莫大なものであったこともまた教えてくれている。このお金に関する話のまとめとしてある先生が語った話を引用する。

「研究とは、そもそも貴族の世界から始まったものである。したがって彼らは金銭に困るという環境にはなかった。もし彼らの研究が金のためであったのなら、真実に係る現在の我々の知識は半分以下になっていたに違いない。」

4. 3 見当識の保持

見当識とは耳慣れない言葉だろうが、これは精神医学の領域で診断の際に使われる専門用語である。しかし、この言葉の解釈をより拡げて普通の人たちが社会の中での行動を評価するのに適用してみることにした。この言葉に近い用語を挙げるとすれば、バランス感覚、センス、状況把握、キレ、当意即妙などの言葉にあたるだろう。したがってこの言葉が個人の行動解釈およびその背景にあるものを理解するのに有用なのである。例えばある会議が開かれていたとしよう。その会議において会議の目的、討論の方法、議論の流れ、時間の経過、出席者の特性等々を、実に的確に把握できる人と、これを全くと言ってよいほどに理解できない人とが存在することが分かる。この後者の人々のために、あたら貴重な時間の浪費を強いられている人々が、この日本全体で毎日何人いることだろうと心配になる。周囲との関係において今の自分の立場というものを十分に自覚でき、それに沿って行動できるということは大変素晴らしいことである。他人を傷つけることもなく、かといって迎合的でもなく、時にユーモラスであり、全体の進行にも配慮するという行動はただただ感心するのみである。このような資質こそ、心理学で言う「IQが高い」とか、「マチュリティーが進んでいる」などの用語を使って表現している総合的な姿ではないだろうか。すなわち心理学の知識を総合化した究極の姿である。

自己表現と現実社会、事実の追及と金銭感覚、組織と個人、権威と行動、好奇心と慢心等々、どれをとってもバランス感覚と心のキレを必要とする局面ばかりである。勿論すでにそれらを十分に備えていると明言できる人は少ないだろうから、是非とも追求し、備えるべき資質だと考えることが大事である。

(開発官付言；人の行動の基盤には心理が働く。その心理を理解、制御することが、その行動を素晴らしいものに変えてくれる。心理学はそれを学問として扱うが、その知識は社会的行動に活かされなければ意味がない。しかもそれは自己が生かす努力をしなければ用をなさない。ということできささかの役に立てば幸いである。)

完